

『仏はどのように願いを叶えるのか』

一

子どもの頃、家の近くには多くの野良猫がいた。

正確に数えたことはないが、十四以上は確かにいた。食堂で働くおばさんたちが残飯を与えたり、猫たち自身が道端のゴミ箱をあさったりして生きていた。

こちらでは、食べ残しは「厨余ゴミ」として分別され、緑色のゴミ箱に捨てられることになっていった。野良猫たちはしばしばその緑のゴミ箱に飛び込み、食べ物を探した。

ゴミ箱の中身は食べ物ばかりなので、臭くなったのは当たり前だ。近づくだけで吐き気を催すほどの臭気が漂った。だから私はゴミを捨てるとき、なるべく近寄らずに遠くから投げ入れた。

もしその中に猫がいて食べ物を探していれば、ちょうど投げ入れたゴミが猫に当たることもあった。重いものではないから怪我はしない。ただ、猫は驚いて飛び上がることになる。申し訳ないことですが、仕方ないんだ。人間の社会で生きる以上、それもまた代償の一つなのだ。

幼い頃から猫と共に過ごしてきたせいで、私は猫好きになった。しかし、父は家で猫を飼うのは面倒だと言った。だから私は高校生になってから、高校のそばの野山に一匹の野良猫を隠れて飼った。

私は毎日その猫に餌をやった。こっそりと、誰にも言わずに。

中国の多くの高校では、生徒は校内に閉じ込められ、外に出ることを許されない。どれほどの期間閉じ込められるかは学校によって違う。私の高校では、一週間のうち六日間は校内で過ごさなければならなかった。

日曜日の午後に一週間分の荷物を持って登校し、次の土曜日の昼によやく帰宅できる。学校では携帯電話禁止、小説や漫画も、トランプやボードゲームも持ち込み禁止。勉強に係のないものは一切許されなかった。

生徒たちは毎朝六時半に起床し、教室に向かう。授業を受け、昼には一時間半の昼寝をし、夜九時半に学校が終わると寮に戻り、眠る。

だから、誰もが自由を望んでいる。

私もまた自由を望んでいた。だから私はその猫を狭い場所に閉じ込めず、去勢もさせなかった。自由は美しいものであり、奪うべきではないと感じていた。

もちろん、これは理屈を言いたいのではない。ただ、猫はそうやって消えた、という話だけだ。

何か面白いものに惹かれたのかもしれないし、気に入った雌猫を見つけて駆け落ちしたのかもしれない。理由は分からない。気づいたところ、餌を置いた場所にもう現れなくなつた。

猫を探すため、私は野山の近くに探し猫の張り紙を出した。そうしてあの日、一本の電話を受け取つたのだった。

「その猫、どんな色か覚えていますか？」私は向こうに聞いた。

「あ、どうやら濃い色のぶち猫みたいだな。黒色に、茶色に、えっと……それからちよつとオレンジも混じってるか？」中年の男の声で、声はとても優しく、「まあ、とにかく色はめちやくちやだけど、しっぽは白いんだ。年はたぶん三、四か月くらいかな。」

話を聞いて、私は確信した。この猫は間違いなく自分の猫だ。それで私は続けて聞いた。

「その猫、今そちらの家にありますか？」

「はい！うちの娘、今週避妊手術に連れて行くつもりだったけど……あ、でもあなたの猫なら、もちろん返さなきゃね。都合のいいときに取りに来てかな？」

「はいはい！ありがとうございます！ありがとうございます！今すぐ取りに行ってもいいですか？」

「いいよ、でもちよつと待ってて。えっと……私も妻もこの街で働いてないから、実家には娘とのおばあさんしかいないんだ。先に知らせておかないとね。こうしよう、一旦メールで住所送るから、着いたらそのままインターホン鳴らせばいい。」

「はいはい！ありがとうございます！では先に切つていいですか？」

「あ待って！そうだ！あとね、あの……うちのおばあさんはね、ちよつと失礼な性格だから、気にしないで。昔動物に噛まれたことがあって、それ以来猫や犬を飼つてる人嫌いな。」

「はい、わかりました。」

電話を切ると、すぐに携帯にメールが届いた。ちょうど夏休み中だったから、学校に行く必要もなかった。住所を調べると、学校から遠くない場所だったので、すぐに向かった。

バスに乗って、二駅で目的地に着いた――

山の麓にある古びた小さな家だった。夏なのに、家の前には汚い黒い落ち葉が山のように積もり、人が住んでいるようには見えない。鉄製の門は塗装が剥げ、錆びだらけで、鍵穴にまで錆が浮いている。

こんな錆びた鍵穴に、どうやって鍵を差すの？

私は門の前でメールの住所を何度も確認し、インターホンを押した。中でベルは鳴っているのが聞こえるけど、誰も出てこない。

おばあさんは耳悪いのか？

十秒くらい置いてもう一度押すと、今度は中から小さな女の子の声が聞こえた。

「おばあちゃん！誰かインターホン押ししてる！」

やがて数秒して門が開いた。中から出てきたのは、とても変な格好をしたおばあさんで、私は今日までその姿を鮮明に覚えている。

茶色のサングラスをかけ、亀の形のスリッパを履き、パッチだらけのパジャマを着ている。胸には小さな十字架が揺れ、その上には読めない細かい文字が刻まれていた。

「猫を取りに来たんだろ？」

サングラス越しにこちらを見ながら、私が口を開くよりも先に、あまり愛想のない声でそう言った。どうやら、最初から私に対していい感情は持っていないようだった。

その態度にどう反応していいかわからず、私は何も言わずにただそううなずいた。

「お礼は？」

「えっ？」

「うちがこんなに長い間猫を育ててやったんだぞ。金もたくさんかかってるんだから、何かお礼くらいしないとまずいだろう？」

「えっと、お礼って…何をすればいいんですか？」

「生きた魚を何匹か買ってこい。水に入れて持つてくるのを忘れるんじゃないぞ？」

私はてっきり、ここ数日猫にかかった費用を払えと言われるのかと思っていた。まさか、そんな変な要求をされるとは思わなかった。

要求はちよつと変だけど、確かにタダで猫を世話してもらうわけにはいかない。

「じゃあ魚の種類は？」

「何でもいい。」

そして、私は近くの鮮魚店に向かい、何匹かの生きた魚を買って、水をいっぱいに入れた袋に詰めた。

魚を持って帰るとき、もう死にそうだった。道中、歩いたり止まったりで、五、六回も休んでようやくやく門まで戻った。普段から体を鍛えてなかったら、途中で本当に倒れてたに違いない。

ピンポーン、ピンポーンー

息を切らしながらインターホンを押すと、すぐに門が開いた。

「入れ。」

おばあさんは門を開けて、私を一瞥もせず、一言だけ残してそのまま家の中に入った。

私は少し躊躇して、すぐには入らなかった。ひとつには、見知らぬ家に勝手に入る勇気がなかったこと、もうひとつには、スリッパも用意してないので、どう足を踏み入れていいかわからなかったからだ。

おばあさんは自分勝手に奥へ歩いていき、少しも振り返る気配がない。仕方なく、私は声をかけた。

「あの、この靴で入っても大丈夫ですか？」

おばあさんはようやく足を止め、振り返って指で玄関横の下駄箱を指した。その上には青い何かがぐしゃっと置かれていて、何度も使い回したような靴カバーだっと見えていた。

開いてみると、「やつはりな——」って、破れていてボロボロだった。

この穴の開いた靴カバーに履き替えて、私はおばあさんの後ろについて、慎重にこの家の中に入った。

玄関を抜けると、そこにはとても狭い廊下があった。壁は少し黄ばんでいて、窓枠にはサビが浮いていた。窓の外の景色は自然ではなく、隣の家のツタに覆われた壁だった。

こんな窓には意味ある？思わず心の中でつつこんだ。

廊下の片側にはキッチン、もう片側には風呂場がある。キッチンの冷蔵庫は半人ほどの高さしかなく、見るからにこの家は経済的にかなり苦しいのが分かった。

廊下を抜けて居間へ入ると、部屋の中央には仏壇が置かれており、その脇には香炉と線香があった。

私はその仏像をじっと見つめていた。すると突然、鋭い声が飛んできた。

「おい！うちの如来仏に触るな！傷でもついたらご利益がなくなるんだ！そのとき、どうやって弁償するつもりだ！」

私は慌てて一歩下がった。おばあさんは鼻でフンと一つ鳴らし、そのまま奥の部屋へと歩いていった。

ここまで来て、ようやく電話で言っていた「失礼」というのがどういうことか理解できた。あの人は、初対面の見知らぬ人に対して、あんなふうに凄むことができるなんて、性格が本当にひどすぎる。

あんなふうにな怒鳴られて、少し腹も立った。私は危ないことなんて何もしていないのに、なんであんな言い方をされるんだろう？でも、猫のためだから、仕方なく我慢して、大人しくついていった。

居間の奥は寝室になっていて、そこでは中学生くらいの女の子がベッドの上でテレビを見ていた。

私の姿を見たとき、彼女は驚いたように声を上げた。

「おばあちゃん！知らない人が来てるなら言っよ！」

そう言っ慌ててアニメを放送しているテレビを消し、立ち上がった。

そのとき、私はようやく彼女の腕の中に毛のない猫が抱かれていることに気づいた。

その猫は、私という見知らぬ存在に対して明らかに警戒して、ずっとこちらを不安げな目で見つめていた。

「おじさんこんにちは！ミララっています！あだ名です！」

「おっ、こんにちは、こんにちは。」

おいちよっと、なんでおじさんって呼ぶんだ？私だってまだ高校生だし、お前より大して年上でもないだろ？口にヒゲでも生えてるから年取っ見えるのか？

彼女はとても人懐っこく、まったく人見知りする様子もなかった。自分のあだ名を言っただけでは満足できなかったらしく、さらにぺちやくちやと話し続けた。

「パパがさっき電話してきたんだけど、あなたがあの猫の飼い主なの？」

「はい。」

「その猫、名前は何ていうの？」

「名前は…ないんだ…」

野良猫だから、名前をつけていなかったのだ。そもそも私は動物に名前をつけるのが好きではない。猫は猫、犬は犬でいい。

「名前がないなんてダメだよ！じゃあ、『乱雑』にしよう！」

どうやらミララは、Dog形式の名前に特別なこだわりがあるらしい。自分のあだ名も、猫の名前もそうだ。どの文学作品の影響を受けたのかはわからないが。

私は決しておしゃべりが得意なタイプではなく、この女の子とどう話していいかわからなかったたので、とにかく相槌を打つしかなかった。

「うん…はい…」

「ごめんねネコ、こんなに勝手な名前になっちゃって。」

「知ってる？乱雑雑はご飯を食べるときすごく可愛いんだよ！しかも人をひっかいたりしないの！」

ミララはまだ話したがっているようだったが、おばあさんが突然声を出して、元気なミララを遮った。

「おい！ミララ！宿題は終わったのか？」

女の子はたちまち眉をひそめた。おばあさんはさらに怒鳴る。

「終わってないのにテレビを見るんじゃない！こんな野良猫を飼ってる変な人と話すな！さっさとドアを閉めて宿題をやりなさい！」

「わかったよ…」ミララはそう言うと、すぐに部屋のドアを閉めた。

ミララがドアを閉めたあと、おばあさんはとても小さな声で独り言をつぶやいた。

「猫を抱かないようにって言ったのに、抱かないって言ったのに…どうして聞かないんだ…」

言い終えると、ようやく歩を進め、私に向かって言った。

「来い、猫は裏庭にいる。」

私はおばあさんの後ろについて、裏庭へ向かった。

裏庭はそれほど広くはなく、小さな池がひとつ、そしてその周りにはさまざまな植物が植えられていた。池のそばにはぼっかりとした空き地があり、そこに、私の猫がいた。

けれども、猫は檻の中に入れられ、檻の猫になっていた。

動かずにじっとしゃがみ込んだまま、檻の中から外の空を見上げていた。もし猫に自分の意志があるのだとしたら、きっと自由について考えていたのだろう。猫というのは、自由を愛する生き物だ。

物音に気づいたのか、猫がこちらを振り向いた。そして、私の顔を一目見た瞬間、すぐに私を思い出したらしく、「にゃあ、にゃあ」と大きな声で鳴き出した。まるで、「助けて」と訴えるように。

「どうして猫を檻に入れてるんですか？」私はおばあさんに聞いた。

「べつに猫が嫌いなわけじゃない。ただ、猫が床の上をあちこち這い回るのは汚いし、体にどれだけ菌を持っているかわからないからなあ。それに、ペットは檻に入れておくものだろう？外に放して飼うなんてありえない。」

「じゃあどうしてこの猫を拾ったんですか？」

「この猫を見つけたとき、もうすぐ飢え死にしそうだったんだ。孫娘がうるさくて飼うように言ったのもある。まあ、私自身も少し善良なことをしたかっただけで、何か見返りを求

めているわけじゃない。人間にとって大事なのは慈悲の心を持つこと、すべての生き物に善良にすること、それは自分自身に善良にすることももある。」

そう言うと、おばあさんは念珠を取り出し、聞き取れないお経を口ずさみながら、空に手を合わせて一礼した。

これはきつと、猫にとっては苦しみだっただろう。檻に閉じ込めて飼うぐらいなら、飼わないほうがましだ。

普段は茂みに潜んで出てこないけれど、それもまた猫の自由だ。檻に閉じ込められて、出たくても出られない、それはもう自由じゃない。最後には、猫は次第に猫でなくなり、きつと自殺してしまうだろう。

このおばあさんは、実のところ動物なんて大嫌いなのだ。言葉の端々から、それがはっきり伝わってくる。これは老人の間ではよくあることだ。昔の人は、自分たちが生きるだけでも必死で、動物にまで愛を分ける余裕なんてなかったのだ。

だがミララは動物が大好きだ。

どうして？

人間は正しいと思ったことを子孫に伝え、間違った考えは修正していくはずだ。ミララの両親は遠くで働いていて、そばにいる年長者はこのおばあさんだけなのに、どうして彼女はそんな教えを受けなかったのだろうか。

「動物なんで結局は動物だ。臭いし汚いし、毛があちこちに抜け落ち……」

その時、裏庭の扉が突然少女によって開かれた。

「おばあちゃん！この猫とお別れしたい！」

「別れなんか言ってるじゃない！とつとと部屋戻れ！」

少女を再び追い払ったあと、おばあさんはまるでゴミでもつかむように、嫌悪に満ちた顔で私の猫を檻から引きずり出した。

「持ってけ、さつさと。」

そして汚えもんを押し付けるように、私に猫を渡してきた。

猫を受け取った私は、そのまま帰ろうとした。だが玄関に差しかけたところで、背後からおばあさんの声が飛んできた。

「おい、待ちな！」

「なんですか？」私は猫を抱きながら振り返った。

「この魚、重すぎて持たれないんだ。あんたが持ちな。」

「どこまでですか？」

「隣の川。」

「川？どのくらいですか？」

「歩いて五分だ。」

正直に言うと、ここまで運んでくるだけで私はもうくたくたに疲れ果てていた。まさかこのおばあさんが、さらにこんな遠くまで運ばせるつもりだとは思いつかなかった。

私は慌てて遠回しに断った。

「悪いけど、私もこんなに長く持つて歩くのは無理です。」

「なに？あんた、魚を数匹買ってきただけで、うちらが猫を世話した分の費用に見合うと思ってるのか？この数日でいくらかかったかわかっているのか？嫌ならいいけど、金で補償してくれ。」

どうしようもなかった。当時の私にはお金なんて出せるはずもなく、仕方なく袋を持ち上げ、おばあさんの後についていった。

道中は何度も立ち止まり、何度も休憩しながら、ようやくおばあさんの言っていた川にたどり着いた。

川辺に着くと、おばあさんは私に袋を地面に置かせ、黒いマジックペンを取り出して魚の体を書き始めた。

私は一匹一匹に自分の名前を書き込んでいくのを見て、疑問に思い尋ねた。

「これは何してるんですか？」

「目が見えないのか？名前書いている。」

「名前を書いているのはわかっています。なんで名前を書かなきゃならないんですか？」

「書かなきゃ仏様に、これが私の放生だって伝わらないだろう？」

伝わらないのか？仏様はそんなに馬鹿じゃないと思うけど。

そのときの私には、まだ何も分かっていなかった。昔の老人たちは確かに放生のことがだいたいいすきだ。

「なんで放生なんてするんですか？」

「善には善の報いがあるからだ。そうやって功德を積むんだ。」

「なんで功德を積まなきゃならないんですか？」

「何度も何度も聞いてうるさいな。功德を積む理由？そんなもの聞くまでもないだろう。」

「おばあさんはまるで馬鹿を見るような目つきで私を見た。「そうすれば死んだあとに、とても美しい世界へ行ける。そこには悲しみがなく、極楽の世界で好きなだけ楽しめるんだ。」」



「でも仏様の世界を目指してるくせに、なんで胸に十字架なんか下げてるんですか？あれは神様の天国じゃないのですか？」

「万が一、極楽世界に行けなかったら、まだ天国に行けるじゃない？あそこも悪くない。何もしないで死ぬよりずっとマシだろう。」

十分後、おばあさんは魚をすべて川に放ち、ようやくその件は終わった。私は山へ戻り、猫を山に返した。

山へ戻ると、猫はすぐに茂みに飛び込み、私が近づくと毛を逆立て威嚇してきた。

結局、猫なんてそんな馬鹿もんだ。助けても感謝なんかしないし、態度は何も変わらない。腹が減ったときだけ近寄ってくる。

私の猫は私の餌を食いながら、一度も私を好いたことなんてなかった。もし人間だったら絶対に好きになれなかっただろう。でも残念ながら、こいつは猫なんだ。私に可愛さともふもふをくれる。私は餌を与える。これが等価交換ってやつだ。

## 二

猫を連れ戻してから三日目の朝、突然一本の電話がかかってきた。ミララのおばあさんからだった。

「もしもし？」

「すぐにうちへ来なさい！ミララが病気になったのよ、あんたの猫のせいだ！」

電話を切ると、私は両親に「友だちに会いに行く」と嘘をついて、すぐにバスに乗ってミララの家へ向かった。玄関の前に着き、チャイムを押すと、おばあさんはすぐにドアを開けた。彼女は前に会った時とまったく同じ服を着ていて、まるでそれしか持っていないかのようだった。

おばあさんの姿を見るなり、私はすぐに事情を尋ねた。

「ミララ大丈夫ですか？何があったんですか？」

だが彼女は何も言わなかった。ただ、私を睨みつけるようにして見てきた。その視線には、まるで言葉以上の罵りがこもっていた。

気まずさを覚えた私は、いつまでも玄関先に立っているのもおかしいと思い、尋ねた。

「中に入って話してもいいですか？」

彼女はすぐに声を荒げた。

「入るんじゃない！」

「え？どうしてですか？」

「そんな畜生の病気、きつと全部うつる病気だよ！あんたまで感染したら面倒くさいだ！」

「じゃあ……私を呼んだのは一体……」

「もちろんあんたを叱るためだ！自分が何をしたかわかっているの！？」

おばあさんの言葉はあまりにも突拍子もなく、最初は意味が飲み込めなかった。

叱るために電話をかけてきた？だが、猫が病気をうつしたんだろ？それを私のせいにされるのは筋が通らない。

けれどおばあさんは完全に私を悪者として見ていた。訛りの強い彼女が怒鳴り散らすように早口でまくしたてるので、正直、何を言っているのか半分も聞き取れなかった。それでも、いくつかの言葉の意味だけは大体わかった。

「こんなもの、生きているだけで害だ！何でこいつらに餌をやるんだ！」

「あんたみたいに情に流される人が、どうして他人まで苦しめるんだ！」

「結局全部あんたが勝手に餌をやったせいだ！あんたがいなければ、こいつはとつくに死んでいただろうが！ミララも病気にならなかったんだよ！」

私は腹の奥に怒りを覚えながらも、何も言い返さなかった。

私のせいじゃないと思っただけでも、相手が怒っている以上、こちらがどう出るかは相手の気持ちを優先するしかない。

おばあさんはそれだけ言うと、ドアを勢いよく閉めた。「バンツ」という音が、玄関に響いた。

### 三

それからさらに二日が過ぎたころ、私ที่บ้านで昼ご飯を食べていると、あのおばあさんからまた電話がかかってきた。電話の中で、おばあさんはミララの病気が少し悪化して、今日から入院したと言い、病院まで来いと言った。

私はもう、おばあさんが何を言うつもりなのかだいたい分かっていた。どうせまた私を怒鳴りつけて、治療費を払えと言うに決まっている。

あの人は猫を拾ったときでさえ金を要求してきたのだから、入院なんて大金がかかることをタダで済ませるはずがない。

正直、私は怖かった。両親にこのことが知られるのが怖かった。あの猫は、私がこっそり山で飼っていた猫だったからだ。

私はまた「友達と遊びに行ってくる」と嘘をついて、バスに乗り、ミララがいるという病院へ向かった。

そこはこのあたりで一番大きくて立派な病院だった。建物は巨大で、隣の駐車場には車がぎっしりと並んでいた。

正面玄関を通って受付のナースステーションへ行き、事情を説明した。おばあさんが事前に話を通していたようで、私は身分証を見せるだけでよかった。

エレベーターで四階へ上がり、505号室を見つけた。病室の前では、看護師がカートを押しながら注射器を準備していた。私は急いで声をかけた。

「すみません、ここはミララの病室ですか？」

「ミララ？いいえ、この病室にはそんな名前の患者さんはいませんよ」

そこでようやく思い出した。ミララは彼女のあだ名だった。私は慌てて言い直した。

「えっと、ミララはあだ名で、本名は……本名は……その、中学生の女の子ですよ？」

「ああ、そうですね。あなたは？」

「知り合いです。今日お見舞いに来ました。病氣のことを聞いて……えっと……」

言いかけて、私はハッと気づいた。

そういえば、名前だけでなく、私は彼女がどんな病氣にかかっているのかさえ知らないじゃないのか？

「そうだ、この病室の子って、何の病氣なんですか？」

「え？病氣も知らないでお見舞いに来たの？」

「はい。患者の家族が教えてくれなくて……」

「そうか……」

看護師は私をちらりと見て、少し驚いたような顔をした。

「その子はね、猫ひっかき病なのよ。」

「猫ひっかき病……？」

「ええ。大した病氣じゃないし、感染もしない。本当なら病院に来るほどでもないの。だけど……」看護師は少し言いにくそうに声を落とした。「その子、体の状態がちよっと特殊でね。だから少し厄介なのよ……」

そのとき、病室のドアが勢いよく開いた。

中からおばあさんが出てきて、何も言わずに私の袖をつかみ、そのまま病院の外へ引っ張っていった。

「ちよつ、ちよつと、何ですか、どうしたんですか？」

「黙れ！外に出てから話す！」

おばあさんは私を病院の外の芝生まで引っ張っていくと、すぐに怒鳴りつけてきた。

「全部お前のせいだ！全部お前のせいだ！」

「猫をちゃんと管理していれば、こんなことにはならなかったんだ！勝手に拾って勝手に放し飼いで、迷惑ばかりかけて、どんな育ちしてんだか……！」

「ミララは腎臓移植を受けたんだ！免疫なんてほとんど残っていないんだぞ！病状は日に悪化している！このままじゃ本当に取り返しがつかなくなる！」

「本当に因果応報って知らないのか！お前みたいな奴にはいずれ仏罰が下るぞ！そのとき誰も助けてくれないからな！」

「その猫もろとも地獄に落ちればいいのに、ったく……今にきつと報いが来る、見てな！仏様は絶対に見逃さないんだ！」

周囲の通行人はおばあさんの声に引き寄せられ、皆ちらりとこちらを見た。その日は、私は長い間怒鳴られ続けた。心の中では腹が立っていたが、ミララの病気のこともあり、口答えはできず、ただ足元の草を見つめ、穴でもあれば入り込みたいと思っていた。

#### 四

その後、私は逃げるように病院を後にした。

バスに乗って、運転手に料金を払っていないと注意されるまで、自分が支払っていないかったことに気づかなかった。無感覚で手すりを握り、窓の外を見つめているうちに、気づけば学校の山下に着いていた。

エサを器に出して、猫がモグモグ夢中で食ってるその姿をぼんやり眺めながら、今日あったことを思い返してた。

ミララの体は非常に弱く、些細な病気でも治療困難な重病に発展する可能性がある。それなのに、なぜあんな野良猫に接触しようとしたのか？最初から接触しなければよかったのではないか？問題があるのはお前たち自身だろう。

「…この猫を見つけたとき、もうすぐ飢え死にしそうだったんだ。孫娘がうるさくて飼うように言ったのもある。」

私の頭に、かつておばあさんが言った言葉がふとよぎった。

…そうだ、ミララはただ私の猫を助けたかっただけだ。ミララは猫が大好きで、見て見ぬふりなどするはずがない。

「…乱雑雑はご飯を食べるときすごく可愛いんだよ！しかも人をひっかいたりしないの！」

その時、ミララが私に言った言葉も思い出した。

でも、実際に引つかかれてるじゃないか。嘘について目を開けているようなものだ。

そうしてようやく気づいた。あの子は、自分が引つかかれたことを隠すために、わざと私にそう言ったのだ。

しかし、なぜ隠す必要があったのか？もしもつと早く病院に連れて行っていれば、こんなに悪化しなかったのではないか。

おばあさんに叱られるのが怖かったのか？私に罪悪感を抱かせたくなかったのか？

湿った落ち葉の上に尻を下ろし、両手を力いっばい土に突き刺し、気持ち非常に沈んでいた。

ミララはどれほど善良な少女なのに、病床で苦しむしかないのか。そしてそれはすべて、私が猫をきちんと管理しなかったせいだ。

けど私はただ猫に自由を与えたかっただけだ。

これは私のせいなのか？自由のせいなのか？

猫が頭を下げて夢中で食べているのを見て、心の奥底に怒りが湧き上がった。

「全部お前のせいだ！ミララを引っかいたのはお前だ！お前が無駄に走り回らなければ、こんなことにはならなかったんだ！」

私は周囲の石を拾い、猫に向かって怒鳴りながら力いっばい投げつけた―

しかし、結局何も起こらなかった。

まるで親が当然のように子供の失敗を子供に押し付けるように、私も当然のように過ちを猫に押し付けてしまったのだ。

猫のせいなのか？

そう言えば、昔、私はとても自由な猫を見たことがある。

まだ幼かった頃、うちの隣の隣に、ゲームが大好きな女の子が住んでいた。本名は今でも知らないけれど、みんなが小宝（ちいたから）って呼んでいたから、私もずっとそう呼んでいた。

小宝はゲーム機と、白くて小さな猫と、いつも階段下のベンチで日向ぼっこしているおじいちゃんと一緒に暮らしていた。

私はよく彼女が日陰でゲームをしている姿を見かけた。当時、彼女が一番好きだったのは『星のカービィ』で、私もそれが好きだった。

あの白い猫は外で飼われていて、聞いた話によると拾った野良猫らしい。左右で色の違うオッドアイの持ち主で、とてもきれいだった。

爪を切るときになると、小宝のおじいちゃんがその猫を抱きかかえる。もし猫が嫌がったら、爪切りで軽く前足をコツンと叩き、少しきつめの口調で叱る。すると猫は観念したようにじっとする。そして爪を切り終わると、彼が手を離れた瞬間、猫はその胸の中から跳ね出て、すぐに遊びに走っていった。

私たちがその猫と遊ぶときは、いつも猫じゃらしを使っていた。小宝はこう教えてくれた。「ずっと捕まえさせないんじゃないかって、たまには成功させてあげなきゃダメなんだよ」って。でも私は、猫は捕まえられないこと自体を楽しんでるんじゃないかと思ってた。

たまに私はその猫を家に連れてきて、一緒に遊んだ。猫も私の家が好きだったみたいで、私はスーパードでいろんなものを買ってあげた。中でも一番多かったのは、デンブンで作られたソーセージや台湾風の焼きソーセージだった。今思えば、猫にとってはあまり良くない食べ物だったと思う。

一度、そのソーセージが原因で猫が下痢をしたことがある。突然「ニャアアアアアアアアアアアア」と鳴き出して、私は意味がわからなかったけれど、トイレにいた父さんがそれを聞いて叫んだ。

「早く外に出せ！」

言いながら、父さんはズボンも履かずにトイレから飛び出してきた。猫を抱えたまま玄関から飛び出して行った。私は、その猫が黄色いものをぼたぼた垂らしながら外へ出ていくのを見た。

そのあと父さんは、床を拭きながら、「今の鳴き方でトイレに行きたがってるってすぐわかったんだ」と言った。

なんだかお父さんの猫語能力に、思わず感心してしまった。けれど残念ながら、そのあと私は下痢で我慢できずに走っていく猫を見ることはなかったから、父さんから学んだその猫語は、結局のところ何の役にも立たなかった。

で、その猫は、ある日ふっと消えた。

父に聞くと「きつとどこかの猫と駆け落ちしたんだ」と言った。幸せな家庭を築いて、団地を出て行ったんだと。

当時の私は、その言葉を信じた。その後もときどきオッドアイの白い猫を団地の中で見かけることがあるからだ。それらを見るたびに、また小宝の猫のことを思い出すんだ。

自由を奪わなければ、いつかはそれぞれの居場所を見つけられるだろう。猫はこう、人も同じだ。

だが、それで本当に自分の望む居場所が見つかるのだろうか？

今日になって、ようやく気づいた。父はあの猫が家出したと言ったが、ただ私を傷つけたくなかっただけだ。当時はどこも猫や犬を捕まえて売る人で溢れていって、あの猫はきつとその連中に捕まったのだろう。人を恐れない猫や犬ほど狙いやすいだ。

多分、最初からロマンチックな家出なんてものはなかったのかもしれない。

自由はお金と同じ、何かを手に入れるためのものだ。ペットは外のルールを知らないから家に閉じ込められるのは、安全を買うため。子どもは世界を知らないから大人に制限されるのは、教育を買うため。

動物たちは自由を好む。人間もまた、自由を求めているのではないだろうか。子どもの頃は親から自由を求めて、大人になったら上司から自由を求める。

でも手の中の自由は限られている。使えば減っていく。人間はいつまでも、買わざるを得ないものを持っているから、いつまでも自由を望んでいる。

お金のように永遠に足りないものなんだ。

これを壊した私は、ミララを死に追いやった張本人だ。

## 六

なぜあのおばあさんは毎日神仏に祈るのだろうか。

私はこれまで神や仏を信じたことはない。そんなつかみどころのないものに頼るより、自分で解決した方がいい。

だが、今になって初めて気づいた。人間には、どうしてもどうしようもない時があるのだと。ミララの病状は日ごとに悪化し、今の発達した医療技術でも手に負えない。そして、私は何をして助けられるのかさえ分からなかった。

無力感が湧き上がり、夜眠れない時には、つい神にミララを助けてくれるよう願わざるを得なかった。

もし本当に神や仏がいるのなら、なぜこんなに善良な少女をこの世から見送らせるのか。ミララが入院して三日目、おばあさんから突然電話がかかってきた。

「ミララがあなたに話がある。すぐに病院に来い！」

電話を受けた私は急いでミララのいる病院へ向かった。

病室の前でドアノブを握ったが、急に中に入る勇気がなくなった。

この事態を作った張本人と、被害者が今まさに対面する。そのことを考えると、ミララとどう向き合えばいいか分からなかった。

きっと私を責めるだろう。

おばあさんは部屋にいるのだろうか。ミララの前で私を叱るのだろうか。

私はドアの前に一分ほど立ち、ようやくノブを回してドアを押し開けた。

迎え入れてくれたのは花の香りでも新鮮な空気でもなく、わずかに消毒液の匂いが漂っていた。

病室は簡素で、非常に普通の部屋だった。猫ひっかき病は人に感染することはないので、特別な隔離はされていない。

病室にはミララだけがいた。

彼女はベッドに横たわり、厚い本を抱えていた。ベッドの横には金属の支架があり、そこにぶら下がった点滴が彼女の手に繋がっている。

私が入ると、彼女は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに笑顔になり、私に微笑みかけて言った。

「ああ！やっと来たね！ずっと待ってたんだよ！」

私は呆然と彼女の笑顔を見つめた。病気の患者とは思えないほどの明るさだ。本当、まったく病人らしく見えない。体調は大丈夫ですか？

不安や恐怖、そして胸を締め付ける自責の念が、一瞬で消えた。

あまりにも優しく、あまりにも温かく、誰よりも美しい心を持っている。もしこんなに善良な人でさえ仏になれないのなら、この世に仏になれる人はいないだろう。



「知ってるよ、おばあちゃんに叱られたでしょう？気にしないで、これはあなたのせいじゃないよ。全部ミララのせいなの。あのとき引っかかれた時、おばあちゃんを心配させたくなかったから誰にも言わなかった。それで今の状態になったの。ばかだよ、ミララ。」なるほど、では今もわざと辛くないふりをしているんだろうね。

「うう…」

私は「ううん、あなたは全然ばかじゃない」と言いたかった。しかし一言目を吐き出した瞬間、ミララは故意に私の言葉を遮るかのように口を開いた。

「ミララ、知ってるよ。ミララがかかったのは『小猫病』で、入院して数日で治るんだよ。ミララはこんな病気に負けたりしない！たかが小猫病、数日で倒すんだよ！」

ミララが言い終わると、病室の外から怒ったおばあさんの声が聞こえてきた。

「ミララ！何度言えばわかるの！ひっかき病だって言ってるでしょ！」

「う…」

ミララはまるで嘘を見破られた子どものように、慌てて話題をそらす。

「そういえば、あの猫は今どうしてるの？」

「どの猫？」

「乱雑雑だよ。」

「普通？」

「いや、そういう意味で聞いているんじゃないの。」ミララは首を振った。「私が小猫病になったってことは、あの猫もきつと小猫病になったんだよね？あの猫、今も元気？」

「ああ…そういうわけじゃないよ…この細菌は猫の爪に寄生しているだけで、猫自身はこの病気にかからないんだ。」

「えっ?! そうなの？」

ミララはそう言うと、すぐに黙り込んだ。

しばらく、誰も何も言わず、とても静かだった。

ミララの心中はきつと辛いだろう。元気にさせなければ、このままではまずい。

なんとか話さなくちゃ！

焦りながらも、話題が全く見つからない。

そんなとき、ふと思いついた。まだ彼女の両親に会ったことがなかったのだ。

慌ててその話題を振ってみた。

「君の両親は今どこにいるの？お見舞いに来てくれたの？」

「昨日、新幹線でミララに会いに来たよ。今はスーパーでいろいろおいしいものを買って  
くれてると思う。」

その時、突然何かがミララの布団から飛び出してきた。よく見てみると、なんとミララの  
飼っているハゲ猫だった。

……え、猫って病院に連れてきていいのか？普通はダメじゃないのか？

「どうしてこの猫まで来たの？」と私は慌てて聞いた。

「この子…あわわのこと？離れたくなかったの！入院中は家でうるさくしてたから、連れ  
てきちゃった。」

「病院ってペットも連れてこれるの？」

「しーっ！」ミララは急いで指で口を押さえ、こっそり囁いた。「こっそり連れてきたの  
よ。今日持ってきたばかりで、まだ看護師さんには見つかってないよ。」

こっそり？退院されないの？っていうか、どうして前提が「見つかること」になってるん  
だ…。

「そういえば、前から聞こうと思ってたんだけど…どうしてこの猫…あわわはそんなに君  
に懐いてるの？猫って普通、人にあんまり懐かないんじゃないの？」

私の猫はいつもお腹が空いたときにだけ甘えてきて、食べ終わるとすぐにそっぽを向くの  
だ。

「普通の猫はそういうものだよ…知ってる？普通の猫は愛不足になったりしないんだ。無  
毛猫だけが愛不足になるの。だって、無毛猫を好きな猫はいないし、人間だってあまり無毛  
猫を好まないからね。」

「じゃあ、君は？無毛猫は好き？」

その質問をした後、自分の愚かさに少し悲しくなった。彼女はもうこの猫を飼っているの  
に、無毛猫を嫌うわけがない。

「嫌いだよ。」

しかし、彼女の答えは私の予想を裏切った。

「え？じゃあなんで…？」

「でもよ、ペットショップで半年も売れ残って、三割引きになっても誰も買わなかった。  
かわいそうで、仕方なくおばあちゃんにお願いして買ってもらったんだ。それで、気づいた  
ら今まで育ててたんだ。あ、そうだ、水を飲む時間みたい。」

「水を飲む？」

「うん！先生が、決められた時間に水を飲まないといけないって言ってたんだ。」

ミララはそう言って、テーブルの上のコップを手を取った。だが、彼女がコップを口元に運んだ瞬間、あわわがベッドから飛び降り、手に持っていた水が服にこぼれてしまった。

「あっ」

「あっ」

私たちは同時に声を出した。するとミララは顔を上げて、笑みを浮かべた…

「へへっ、これで洗濯代が節約できたね。」

彼女は気にしていない様子で、軽い口調で冗談を言った。

その後、着替えが必要なミララに別れを告げ、私は病院を後にした。

心の重さが意外にも和らいでいるのに気づいた。ひとつは、ミララの明るく前向きな性格のおかげで気が楽になったこと、もうひとつは、あのおばあさんに会わずに済んだことだ。

けどその気持ちは、ほんの一次的なものにすぎなかった。

夜になって布団をかぶり、心を落ち着けると、頭の中はミララがこの病気で死んでしまうかもしれないという不安でいっぱいになった。眠れなくなり、朝が来るまで目を閉じることができなかった。人生で初めて、朝までまったく眠れなかった。

翌朝、眠気のまま、私は早めに病院へミララを見舞いに行った。病室に入ると、ミララは昨日と同じように、あの厚い本を抱えて読んでいた。

「その本、最後まで読むつもりなの？」

「うん。今年の誕生日の願いごとに、この本を読み終えるって決めたの。でも分厚いし退屈だから、いつも最初の数ページで止まっちゃうの。」

「みんな、読みたい本は最後まで読めないもんだよね。」

「そうだねそうだね。少なくとも——」

ミララは何かを言おうとしたが、口を閉じて、言葉を飲み込んだ。

私と彼女が話せることは、昨日の時点ですべて話し尽くしてしまっていた。そのあとは何を話せばいいか全く思いつかなかったの、すぐに病室を出た。

この数日、毎晩眠れなかった。時には目を開けたまま、カーテンの向こうから少しずつ明るくなるのを見ていた。昼になると、学校を出るとすぐに病院に向かい、ミララのところへ行って話し相手になった。基本的には自分の猫のことばかり話していたが、ミララは毎回笑ってくれた。

だんだん彼女のことがかかってきて、すぐく明るくてユーモアの子だと思えるようになってきた。死と向き合っている、絶望して恐怖や不安を見せることはなかった。

ある日、彼女は「一番好きな芸能人はチャップリンだよ」と言った。チャップリンのユーモアを学ぶためにノートを作って、どうすればもっと面白く話せるか、動けるかを研究しているのだという。

ある時、私が病室に入ると、彼女はわざと苦しそうなふりをしてみせ、私が慌てるのを見て楽しそうに笑った。

しかし五日目の朝、私は病室でミララの姿を見つけることができなかった。

## 七

ベッドのそばで、ミララがずっと抱えていた本が床に落ちていた。まるでわざと床に置かれたかのように、本のしおりも本からかなり離れた場所まで飛んでいた。

状況を確認しようとおばあさんを探したが、どこにも見当たらなかった。

そういえば、昨日からおばあさんの姿を見ていなかった。

普段は朝から晩まで病室の入り口に座って天井を見つめており、私が来るとすぐに叱っていた。

どこに行ったのか？なぜミララのそばにいないのか？

入り口の看護師に聞くと、ミララは今朝突然意識を失い、ICUに運ばれたことがわかった。

指示に従ってICUの病棟エリアに向かうと、遠くにミララの両親が見えた。

両親は外で医師と口論しており、現実を受け入れたくない様子だった。何を言っているのかよく聞き取れなかったが、後で聞くと、彼らが医者に中薬でミララを治療するよう主張していたため、医者と口論になったということだった。

これは不思議なことではない。現在でも、多くの人が伝統医療の力を盲目的に信じ続けている。

私はミララの親族ではないため、ICUのエリアに入ることはできず、遠くから見るとしかなかった。おばあさんもどこに行ったのかわからず、私は家に戻り、病院からの連絡を静かに待った。

ミララがICUに入って三日目、彼女の父親から電話がかかってきた。

その時になって初めて、自分が携帯を手取る勇氣すらないことに気づいた。実際に直面するまで、自分が恐れているものに堂々と向き合うことなど到底できないとわからなかった。

しかし、結局私は電話に出た。電話で何を言ったかほとんど覚えていない。最後の数言だけ覚えている。

「……こういうことで、ミララがあなたに会いたいと言った。今は友達と会っているの  
で、30分後に来てください。」

「病状はどうなっていますか？」

「……まず来てください。病状のことは後で話す。」

病院に着き、看護師に従ってICUの病棟エリアに行くと、ミララの両親が入り口の椅子に座り、頭を後ろに倒して壁にもたれかかり、眠っているようだった。

看護師は彼らを邪魔せず、隣の更衣室で私に無菌防護服に着替えるよう小声で告げた。

「覚えておいて、見舞いは5分だけ。それを過ぎたら必ず出てください。」

「わかりました。」

私はうなずき、看護師の後について金属製の病室の扉をぐり中に入った。

扉が閉まると、周囲は一瞬にして静まり返った。聞こえるのは心電計の「ピーツ：ピーツ……」という長い音と、患者の咳だけだった。

元々ミララがいた病室は個室だと思っていたので、ICUも個室だと思っていた。しかしここには四つのベッドがあった。ベッド同士は移動可能なカーテンで仕切られ、各ベッドの周りには呼吸器、点滴架、モニター、そして色とりどりのチューブが並んでいる。

私は看護師に従い、ミララのベッドに向かった。途中で通りかかった患者は気管チューブを挿管されたまま、動かずベッドに横たわっていた。

看護師は私を中まで案内すると、そのまま立ち去った。

ミララのベッドの前に着くと、三日ぶりのミララが目に入った。

彼女はベッドに横たわり、体は以前よりずっと痩せていて、記憶の中の彼女とほとんど重ならなかった。

いつも笑っていたあの少女は、今やベッドに横たわり私と目を合わせるだけで、目を細めて笑うことすらできなかった。

これが私にとって、彼女の笑っていない姿を見る初めての瞬間だった。

しかし、彼女はすぐに無理にでも笑顔を作った。

「来てくれたんだね。」

「あなたのお父さんに呼ばれたんだ……」

その言葉を言った後、私は何を話していいかわからなくなった。結局、話題を切り出したのは彼女だった。

「最近、猫の写真を撮ったことあるの？」

「あるよ。」

ポケットからスマートフォンを取り出し、ミララに最近の猫の写真を見せようとしたが、防護服を着ているせいでロックを解除できなかった。その瞬間、私たちの間で唯一話せる話題が、あっけなく消えてしまった。

病室の中は再び静まり返り、モニターの「ピッ、ピッ」という規則的な音だけが響いていた。

ミララの体を覆う布団がわずかに上下し、呼吸が浅くて、今にも止まりそうに見えた。

「ごめん。」

思わず口をついて出た。

ほかの言葉は言わなくてもいい、でもこの一言だけは言わなければならなかった。

ミララは一瞬固まったが、何も言わなかった。

そして、静寂の中に小さなすすり泣きが届いた。

ミララは泣いていた。

彼女は何も言わず、ただ黙って泣き続けていた。目尻からあふれた涙が頬を伝い、枕に落ちるのが見えた。

小さな手が白いシーツをそっと握りしめていた。見下ろすと、そこには針の跡で赤く点々とした、血の気のない手があった。

「死にたくない……」

声が震えていて、とても、とても小さかった。

「自分の好きなものに殺されるなんて……つらいし、怖いよ。もつとこの世界を感じてみたい……こんなふうに自分のすべてを全部なくなってしまうのは怖すぎるよ……」

その日、日記を書く気には到底なれなかった。だからそのあと自分が何をしたのか、何を考えたのか、今ではもうまったく思い出せない。ただひとつ覚えているのは、最後に午前四時ごろ、睡眠薬を二錠飲んで、そのまま意識が途切れたことだけだ。

その後さらに二日が過ぎ、ミララはずっとICUに入院していたが、病状は全く改善しなかった。私は家族の同意がないため、ずっと見舞いに行くことができなかった。見たくもなく、聞きたくもなく、そうすれば永遠に直面しなくて済むかのように思えた。

「リンリンリン…」

三日目の朝、突然電話の呼び出し音で目を覚ました。

枕元のスマートフォンを手に取り、画面を見ると、発信者の名前が「猫を見つけた人」と表示されていた。これはミララの父の携帯電話だった。

ミララに何かあったのだろうか。

心臓は激しく打ち、大脳は真っ白になり、震える指で通話ボタンを押し、ミララが亡くなった事実を受け入れる覚悟をした。しかし、電話の向こうから聞こえてきたのはミララの元気な声だった――

「もしもし？ごめんね、こんなに早く起こしちゃって。」

彼女の声は以前のような力のない声ではなく、ずっとはつきりとしていた。私はすぐにベッドから飛び起き、部屋で立ちながら応答した。

「ミララ？君…大丈夫なの？どうして君から電話してるの？」

「うん！ミララは昨日の午後に輸入された新しい薬を飲んでからすでに回復し始めてるよ！今朝は体温も正常に戻って、医者があと数日入院して経過を見れば退院できるって言うてた！」

「そうなの？そうなのか？それは本当に良かったじゃないのか！」

そのあと、まだ言いたいことはいくらでもあったけど、ミララは医者に体の検査をしてもらうと言い、電話を慌ただしく切った。

すると三日後、彼女は無事に退院し、自宅に戻った。

あの日の午後、私は誘ってされたから彼女の家に向かい、玄関のチャイムを鳴らした。

しかし、今回ドアを開けたのはいつものおばあさんではなく、ミララだった。彼女の顔には笑顔がなく、むしろ少し悲しそうな顔をしていた。挨拶の後、私はこの異常の顔の原因を尋ねた。

「どうしたの？嬉しくないみたいだよ。」

「おばあちゃんは…亡くなったの。」

「えっ？亡くなったの？どうして？」

「病院のそばで、悪い人に『仏像の前で三日間飲まず食わずでひざまずけば仏が感動して願いが叶う』と言われて、おばあさんはそれをそのままやったんだ。それに一万元払って、その人から仏像も買ったんだよ。」

ミララは必死に涙をこらえながら、話を続けた。

「家族が病気になるたびに外に出て、行くと数日戻ってこないんだよ。だから誰もこのとに気づかなかったよ……」

ミララは私を連れて、おばあさんが魚を放生していた小川のほとりへ行った。川のそばには仏像が置かれており、その前には座布団が置かれていた。座布団には二つのくぼみがあり、長時間誰かが跪いていたことがわかるほど、スポンジは弾力を失っていた。

人は絶望の中にいると、何でも信じてしまうものだ。神なんて一度も信じたことのない私でさえ、毎日毎晩、神様にミララを助けてくれと祈っていた。

「その詐欺師、捕まったの？」

「まだだよ。父によると警察が犯人を追っていて、もうすぐ捕まるはずだつて。」

ミララの話聞きながら、その出所のわからない仏像を見ると、仏像の体に小さな文字が刻まれているのに気づいた。誰かが尖ったもので歪んだ文字でこう書いていた。「仏さま、極楽に行きたくありません。私の功德で孫娘の命を取り戻せませんか？」

「乱糟糟のこと、恨んでないの？」そのとき、私はそう尋ねた。でも、本当は私が確かめたかったのは、彼女が私を恨んでいないかどうかだ。

「乱糟糟を恨むって？どうして？」

「もしそのとき乱糟糟を引き取っていなければ、病気にならず、おばあさんも亡くならなかったんじゃないの？」

「それもミララのせいだよ。乱糟糟とは関係ないし、おばあちゃんがミララに最後に言った言葉は、『あわわをちゃんと大事にしなさい』だったんだ。」

そう言って、ミララは抱いているあわわをぎゅっと抱きしめた。

ああ、なるほど、そういうことか。彼女はずっと自分の望む極楽世界をミララに与えていたのだ。その極楽世界は、彼女が欲しかったけれど手に入れられなかったものに満ちており、当然愛も含まれていた。だからミララは愛に包まれて育ち、自分の愛を他人に分け与えることができるのだ。

この奇跡のような性格はまるでだれの夢のようだ。

おばあさんは家で唯一仏教を信仰していた人だったので、亡くなった後、仏像は両親によって売られ、置かれていた場所も空いた。

家は非常に狭く、すでに様々な物でいっぱいだった。ミララはおばあさんの骨をどこに置くべきかわからず、その空いた場所に置いた。